

子猫を迎えたら～子猫を迎えた飼い主に伝える行動学～

藤井 仁美¹⁾²⁾

1) 代官山動物病院 行動診療科 (〒150-0033 東京都渋谷区猿樂町16-15 DAIKANYAMA T-SITE GARDEN 1棟)

2) 自由が丘動物医療センター 行動診療科 (〒152-0023 東京都目黒区八雲3-24-9 自由が丘キューブ1F)

Behavioural Advice for Kitten Owners

Hitomi FUJII

1) Daikanyama Animal Hospital, 16-15 Sarugaku-cho, Shibuya-ku, Tokyo 150-0033, Japan

2) Jiyugaoka Animal Medical Center, 3-24-9 Yakumo, Meguro-ku, Tokyo 153-0023, Japan

(動物臨床医学 29(3)93-98, 2020)

はじめに

2018年の全国犬猫飼育実態調査の結果[1]では、猫の飼育頭数は964万9千頭であり、犬の飼育頭数(890万3千頭)を超えていることがわかった。その前年の2017年の調査[2]で犬と猫の飼育頭数の逆転が生じてから2年連続、しかも前年の952万6千頭を上回る頭数になったことは特記すべきことである。

それに伴って動物病院に来院する猫の頭数も増加傾向にあるのではないと思われる。特に子猫は予防接種や不妊手術などで動物病院を訪れる機会が必ずあるはずである。この機会に飼い主に行動学的な助言や指導を行うことは、その猫の一生を左右するほど重要なことであると同時に、飼い主と猫との幸せな生活のためには必要不可欠なことである。現在では猫の行動学を勉強できるようになったかもしれないが、実際に身につけた知識を日々の臨床現場で活用し飼い主に伝えて実践を促すにはどうすればよいのかなどに悩んでいる獣医師や動物看護師も多いだろう。

本稿では、子猫の行動について飼い主に何をどのように伝えればよいかという点について説明する。

猫の正常な行動の特徴 [3-7]

飼い主に猫の行動について説明するためには、動物病院スタッフが正しい知識を知っておかなくてはいけない。猫の行動の代表的な特徴を以下に挙げた。もちろんこれ以外にもたくさんあるので詳しいことは成書などで勉強していただきたい。

① 猫は基本的には単独で行動をする動物である

猫は犬とは違い本来は群れを形成せずに単独で行動する動物であり、家畜化の過程でほぼ変化することはなかった。「単独で行動する」ことは、誰の助けも借りずに生きることであり、「自らが脅威にさらされて傷つくこと=死」を意味する。よって他者と協調し社会生活を送ることよりも自分自身が生き延びることが最優先課題となるため社会性に乏しく、見知らぬ人や環境に対して非常に警戒する。しかし現代の家庭で生活している猫たちは、一緒に暮らすメリットがある場合には仲間とともに生活する方がよいと考えることもあるようだ。つまり飼い主や同居猫などと一緒に暮らすメリットを与えるべく、子猫の時から飼育環境を整え、社会化などの努力も行い、日々の猫への接し方などに注意を払えば、猫は家庭という社会の中で十分幸せに生活できるだろう。

② 猫は縄張り意識が強い

単独で行動し生活をする猫は、自分ひとりで生きていくために安全を確保し身を守りつつ、安心して必要物資を確保できるような場所=縄張りを非常に重要視する。縄張り内には食事、水、休息や就寝場所、隠れる場所、上下運動ができる場所、安全に外の刺激を感じられる場所、トイレ、爪とぎ、おもちゃなどの物資や、飼い主との好意的な社会的交流および遊びの機会などが必要である。複数飼育の場合は各々の猫が個別に邪魔されることなく快適にこれらの物資を利用したり飼い主と交流できるようにしなくてはならない。

③ 猫の感覚やコミュニケーション方法は人と違う部分がある

猫は視覚、聴覚、嗅覚、触覚などをつうじて相手とコミュニケーションをとる。飼い主や動物病院スタッフが猫の気持ちを正しく理解しコミュニケーションするためには、猫のシグナルを誤解のないように読み取る必要がある。

- 視覚的シグナルでは表情・姿勢などのボディランゲージや行動をよく観察するとよい。
- 聴覚的シグナルは人にとって比較的理解しやすいものだろう。
- 嗅覚的シグナルも猫にとっては非常に重要で、爪とぎ・体をこすりつける・尿をかけるなどのマーキング行動をすることで（人を含めた）他の動物にメッセージを送る。猫がどこにどんな匂いを残し、それはどんな意味があるのかなどを人は想像しながら嗅覚的シグナルを読み取る必要がある。
- 触覚的シグナルは信頼している人・猫・犬などに対して行う行動であり触れ合う・舐め合う・グルーミングし合うなどで親愛の情を示す。

④ 猫には捕食本能がある

猫は本来獲物を単独で捕まえ殺して食べる動物である。したがって猫にはそのための身体能力や獲物を殺すための武器となる鋭い爪や犬歯が備わっている。家庭で飼われている猫にも捕食行動の本能は残っており、遊びをとおして捕食行動が発現する。本来獲物を捕まえて殺すための行動なので、その対象が人や同居動物になると、ときに本気で襲われて大怪我をしてしまう危険があるため注意が必要である。

⑤ 猫も犬と同じく学習する

猫も犬と同様に学習する動物であり周囲の環境・状況・社会的関係などからさまざまなことを学習し行動する。猫は犬以上に自己防衛本能が強いこと、社会性が犬よりも低いことなどから、損得や危険を見分けるための判断が早く、恐怖や不安といった情動に伴って行動が変化しやすい。さらに他者のために自分が我慢することも苦手な傾向にあり、不満や葛藤といった情動に伴う行動も起こりやすい。

⑥ 社会化に最適な時期（社会化期／感受期）が犬よりも短い

猫の社会化期は生後およそ2～9週齢と考えられており、犬（およそ3～12週齢）に比べて短い。この時期に社会化に必要なことを実践しないと、後に初めて遭遇する刺激（生物および非生物）に対して警戒や恐怖の反応を発現しやすくなるが、猫がこの社会化期に

生涯生活する家庭にいることは少なく、ブリーダーやペットショップにいる間に最適な時期を終了してしまう場合も多い。社会化期以降も刺激に慣らすことは可能だが、警戒や恐怖も強くなることを考慮して行わなくてはならない。よって社会化期終了後の子猫を家庭に迎え入れた場合はそれを踏まえての対応が必要になる。

子猫が動物病院にやって来たら

子猫が動物病院にやって来る時は、適切な飼育環境と飼養管理について助言や指導するチャンスでもある。一般のおよび医学的な情報に加えて、以下に挙げるような行動学的な情報も飼い主から聴取し、適切な助言および指導を行うとよい。

飼い主から聴取すべき行動学的情報

- A) 子猫の一般のおよび医学的な情報（シグナルメント、病歴など）
- B) 入手した日にち、入手先（ペットショップ、ブリーダー、保護団体など）と入手先での様子
- C) 拾った子猫なら、当時の子猫の状態やその後の世話の方法など
- D) 飼い主の家庭で生まれた子猫なら、出産前後の環境と母猫の様子、出産後の飼い主の対応や世話の方法、離乳の時期と方法など
- E) 子猫の両親のこと（気質や行動の特徴など）
- F) 現在の環境と世話の方法（給餌、トイレ、環境、遊び方、接し方、お手入れ方法など）
- G) 一緒に生活している飼い主および同居動物との社会的関係について
- H) 飼い主の生活スタイルや日課などについて
- I) 現在気になっていることについて（身体的なことや行動など）

これらの行動学的情報をもとに、その子猫の生い立ち・経緯・気質などを知るとともに、環境や飼養管理法が適切かを判断する。各猫の経緯や気質に応じて、不適切または不足している部分や、飼い主が理解していない部分など助言および指導することが望ましい。

「猫にとって快適な環境づくりのためのガイドライン」(Table 1) [8, 9] が発表されているので、その各項目が十分満たせることを目標にするのもよい。ただし初回の来院時にガイドラインのすべての項目について詳細に説明するのは時間的に無理があり、なにより飼い主がすべてを理解することは不可能だろう。後日、診察時間とは別に昼休みや休診日などを利用して「子猫のための個別カウンセリング」や「子猫クラス」などを実施して、飼い主にじっくりと指導できる機会を

Table 1 猫にとって快適な環境づくりのためのガイドラインにおける5つの柱

<p>第1の柱</p> <p>安全で安心できる場所を用意すること</p> <ul style="list-style-type: none">✓ 段ボールや猫キャリーなど身を隠せる場所を用意する✓ 見晴らし台や棚など周囲を監視できかつ邪魔されない場所を用意する✓ 日常的にキャリーバックに入ることに慣らす(フードやおやつを中で与えるとよい)✓ 複数頭飼育ではその場所にたどりつける経路を複数用意する (強い猫が経路をふさぐことのないようにする)
<p>第2の柱</p> <p>猫にとって重要な必要物資を複数用意し、環境内に複数箇所、それぞれ場所を離して設置すること</p> <ul style="list-style-type: none">✓ 必要物資とはトイレ、フード、水、爪とぎ、おもちゃ、休息/就寝場所などである✓ 複数頭飼育の場合は上記を猫の数+1ずつ用意し、お互いを離して設置する✓ 適切な形や大きさの猫用トイレおよび猫砂を用意する✓ 猫用トイレは清掃をまめにかつ適切に行う。砂の全交換を2～4週間に1回実施する。
<p>第3の柱</p> <p>遊びや捕食行動の機会を与えること</p> <ul style="list-style-type: none">✓ フードやおもちゃを使い捕食行動を真似た遊びや行動をさせる✓ フードが出せる知育玩具(パズルフィーダー)を与えてひとり遊びをさせる✓ フードをばらまいたり投げたりして追いかせさせる、フード皿をあちこちに隠して探させる✓ 各猫の好むおもちゃを使って人と一緒に遊ぶ
<p>第4の柱</p> <p>好意的かつ一貫性があり予測可能な、人と猫の社会的関係を構築すること</p> <ul style="list-style-type: none">✓ 無理にではなく、あくまでも猫のペース・好むスタイルで交流する (声かけのみの交流や遊びを通じた交流を好み、それ以上の交流を嫌う猫も多い)✓ 猫に自分自身が状況をコントロールしていると思わせる(猫に不満や葛藤を与えない)✓ 嫌がる猫を無理に触ったり抱っこしない。触る場合は場所や触り方に気をつける✓ 過干渉を止める✓ 嫌悪刺激を使わない(大声で強く叱責する、体罰を与える、押さえつける、大きな音で脅かすなどといった対応を止める。いずれも猫の恐怖や攻撃性を増幅させてしまう)
<p>第5の柱</p> <p>猫の嗅覚の重要性を尊重した環境を用意すること</p> <ul style="list-style-type: none">✓ 猫のいる環境内の匂いに注意し、匂いの強いものや刺激臭のあるものは使わない✓ 外の匂いを持ち込む場合や動物病院に連れて行った後の匂いなどに注意する✓ 猫フェイシャルフェロモンF3類化合物(フェリウェイ)を利用する✓ マーキング用に爪とぎを用意する✓ 猫がよくこすりつける場所を清掃しない(匂いを残しておく)

設けることが推奨される。忙しくて来院できない飼い主には初回来院時の待ち時間や会計後に、Table 1のようなプリントを渡し簡単に説明したうえで、メールやSNSなどを使って詳細を指導するという方法もよいだろう。子猫時代から飼い主と密に交流し、成長過程を見守りながらよい信頼関係を築くことができると、その飼い主は猫の一生にわたって通院してくれるようになる可能性が高くなり、動物病院にとってもメリットが大きいだろう。

グループディスカッションでは、飼い主から猫の行動やしつけ方について相談・質問された場合の助言や指導内容を話し合っていきたい。

じゃれつきや甘咬みについて

実際の臨床現場では、子猫のじゃれつきや甘咬みについて相談される機会も多いと考えられる。例えば、飼い主から以下の質問をされたら皆さんならどうするだろうか？

グループディスカッション (1)

「家に迎え入れた子猫が私や家族を咬んだり引っかいたりします」

- ✓ 相談者からどのような情報を追加で聴取すればよいか？
- ✓ その問題行動の起きる理由として何が考えられ、どう飼い主に説明すればよいか？
- ✓ 初期対応として具体的に何をどのように助言・指導すればよいか？

遊びの工夫

特に子猫の場合じゃれつく・甘咬みするという行動は、人を獲物だと思って捕食行動や遊びのつもりで行なっているケースが多い。これらは子猫にとって正常な行動であるため、無理に抑えることは子猫の身体的および精神的成長を阻害することとなる。この正常行動が人にとって問題行動とならないための工夫が求められるので以下に簡単に解説する。

● 猫にとって遊びとは？

猫の遊びは3種類に分類される [7]。

◇ 相手を対象とした社会的な遊び (猫同士の遊び)

「社会的な遊び」とは兄弟姉妹の子猫同士がメインで行う遊びであるが、母猫を相手にしたり、状況によっては血縁関係のない子猫同士が行うこともある。この遊びは生後3週齢ごろから始まり12～16週齢にかけて減少していきその後はほぼ消失する。

成猫同士でも仲間同士 (=同じ社会的グループに属した猫同士) は社会的な遊びを続ける場合もあるが、その遊びをよく観察すると全てが友好的な遊びとは限らず、中には敵意を持った行動も含まれている場合が多いと考えられている。

◇ 物 (獲物) を対象とした遊び (物 = 生物および非生物)

生後7週齢頃からは捕食行動のスキルを身につけるための「物 (獲物) を対象とした遊び」が始まる。社会的な遊びが減少・消失する18週齢以降には、ほぼ物 (獲物) を対象とした遊びになっていくため、例えば人や動物 (猫や犬など) に対してじゃれたり遊んでいるように見える行動も、それらを物 (獲物) だと考えて捕食行動や遊びを行っているとして理解するとよい。また非生物であっても動くものであれば猫にとっては獲物に見えるので、おもちゃなどで遊ぶ時もこのタイプの遊びをしていると考えてよい。

◇ 体を動かす遊び

遊び相手や物 (獲物) など対象がある遊びではなく、単に体を動かすための遊びも猫は行い、高いところに上り下りする・走り回る・探索するといった行動がこれに含まれると考えられている。

◇ 猫の捕食本能を満たすための遊び方

◇ おもちゃを使った遊び

猫はおもちゃを獲物に見立てて捕食欲求を満たしながら遊ぶ。猫が喜んで遊ぶおもちゃには好みがあるため、数種類のおもちゃを用意して遊んでみるとよい。おもちゃのタイプには次のようなものがある。

- ・釣り竿タイプ
- ・猫じゃらしタイプ
- ・ボールや編みぐるみなど投げたり転がしたりするタイプ
- ・抱きついたり蹴ったりできる大きさのタイプ など

◇ フードやおやつを使った遊び

フードやおやつを使えば、捕食行動のうちの「食べる」という部分まで満たすことができる。飲み込んでしまっても問題ないのでおもちゃの誤食の心配がある猫にも勧められる。また食欲がよく肥満傾向の猫なら、1日分のフード全てを遊びながらあげると運動もできてよいだろう。具体的には猫の目の前でフードを少し遠くに投げて食べに行かせる方法や、フードを隠して宝探しゲームをするという方法などがある。猫は高いところにも上れるので、キャットタワーの上などにフードを置いてよい。

また猫も犬と同じく学習する動物なので、フード

やオヤツを報酬にを使ってトレーニングをすることは可能である。ただし犬のように指示に従わせるのを目的とするのは難しい。よって以下のようなことを目的とするとよい。

- ・フードを獲得させるために猫に頭を使わせること
- ・積極的に体を動かしてもらうこと
- ・猫に楽しさを与えること
- ・爪切りやブラッシングを嫌がらないようにすることや、キャリーに自分から入ることなど望ましい行動を自発的に行わせること

◇ ひとり遊び

猫がフードを食べるために何らかの努力や作業をしなくては獲得できないタイプのおもちゃ（パズルフィーダーまたは知育玩具という）を与えて遊ばせるとよい。パズルフィーダーの利点は、猫に努力する作業をさせることで捕食行動のうちの「食べ物を捕まえる」という欲求を満たすことができる点だけでなく、飼い主が遊びに付き合わなくても猫だけで楽しめて、退屈させずに済むという点もある。また簡単にフードを食べることができないことで、猫が一気に食べることがなくなる。努力して獲得したフードを食べることは、ただ目の前のフードを食べるよりも猫に達成感を与えることができるというのも利点である。

さらにパズルフィーダーには以下のようなメリットも報告されている [10]。

- ・ストレスに関連したサインを減少させる
- ・体重減少に貢献する
- ・人や猫に対する攻撃行動を減少させる
- ・不安や恐怖、関心を求める行動、不適切な排泄などの問題行動を減少させる

人になつき、抱っこやお手入れなどを好きになってもらう方法

猫の場合じゃれつきや甘咬みに次いで多い質問が、なかなか慣れてくれないといったことかもしれない。例えば、以下の質問をされたら皆さんならどうするだろうか？

グループディスカッション 2

「子猫を迎え入れて1カ月経つのになかなか私や家族になついてくれない。なついてくれるためにはどうしたらよいでしょうか？できれば抱っこやお手入れもしたいのですが・・・」

- ✓ 相談者からどのような情報を追加で聴取すればよいか？

- ✓ なつかない理由として何が考えられ、どう飼い主に説明すればよいか？
- ✓ 相談者になつき、抱っこやお手入れもできるようになるためには、具体的に何をどのように助言・指導すればよいか？

猫のシグナルや行動

飼い主家族の猫に対する接し方や対応／期待

飼い主家族になつかない場合、その理由を推察するには子猫の発するシグナルや行動などを観察してもらうとよい。大抵の場合なつかないのは人に対して恐怖や不安を感じているからなので、家庭内の多くの場面や状況で恐怖や不安に関連したシグナルや行動を発しているはずである。それらを飼い主がしっかりと読み取り、擬人化することなく子猫の真の気持ち（情動）を理解することは大切なことである。

さらに飼い主自身の普段の態度や動きもチェックし恐怖や不安を与えていないかを確認する。例えば大きな声を出して話す／笑う、足音を立てて歩くなどといった、飼い主にとっては無意識の行動も、恐怖や不安を生じさせる刺激になっていることがある。さらに飼い主たちがどのように子猫に接しているか、なつかない／そばに寄ってこないといった時にどのような対応をしているか、その子猫に何を期待しているかなどもチェックする。無理になつかせようとして猫を怖がらせるようなことをしていたり、猫に対して過度の期待を抱くあまり何か無理強いしているケースも多い。

飼い主たちの日常での行動・間違った接し方や対応・過度の期待などを改めて、猫の気持ちや習性に即することができるように注意／工夫して生活すれば、猫の恐怖や不安を軽減することができ、それこそが猫が飼い主になつくための第一歩となることを助言・指導するとよいだろう。

こういった情報の聴取や飼い主への助言・指導の際は、スマートフォンやパソコンの動画や画像機能を利用すると伝わりやすい。

猫の学習

社会化期を過ぎた猫の場合、すでに警戒や恐怖反応を起こしやすくなっているため、無理やり抱っこしたりお手入れしたりすれば、攻撃行動や逃避行動などを含めた恐怖や不安による問題行動の原因になってしまうので避けるべきである。

まずは「人とは警戒したり怖がる相手ではなく、むしろとてもうれしい相手なのだ」と猫に学習させる必要がある。学習理論でいうと古典的条件づけやオペラント条件づけなどを利用し、すでに恐怖を生じている

場合は系統的脱感作を拮抗条件づけや行動置換法などと組み合わせながら行動修正法を進める。この際は猫のボディランゲージや行動から気持ちを読み取りながら、無理のないように慎重進めなければいけない。もちろん体罰を含む嫌悪刺激を使った罰などは使用してはいけない。猫に選択肢を与え、その場面や状況をコントロールしているのは猫自身であると思わせること、猫と人の好意的な関係づくりをすることが重要である。

抱っこやお手入れなどは猫にとって本来不自然な行為であるため、飼い主が無理なくできるようにするためには、それらを嫌がらないように猫に学習させないといけない。

猫に適切に学習させるためには、飼い主がその方法を正しく実践できるように獣医師や看護師などがステップごとに段階を踏んで丁寧に指導する。この際も動画撮影などが役に立つ。

おわりに

以下の2冊の書籍には子猫の飼い主への助言・指導に関する実践的なことが記載されている。本稿の内容を復習する際の参考にしていただきたい。

- 水越美奈（監修）、日本獣医動物行動研究会：犬と猫の問題行動の予防と対応 飼い主ができる上手な飼い主指導、緑書房、東京（2018）
- 村田香織：パピークラス&こねこ塾 スタートBOOK、インターズー、東京（2019）

引用文献

- 1) 平成30年（2018年）全国犬猫飼育実態調査結果、一般社団法人日本ペットフード協会 <https://petfood.or.jp/topics/img/181225.pdf>（2019年8月閲覧）
- 2) 平成29年（2017年）全国犬猫飼育実態調査結果、一般社団法人日本ペットフード協会 <https://petfood.or.jp/topics/img/171225.pdf>（2019年8月閲覧）
- 3) Turner C, Bateson P (Eds) : The Domestic Cat - The Biology of its Behaviour Second Edition, Cambridge University Press, UK (2000)
- 4) Turner C, Bateson P (Eds) : The Domestic Cat - The Biology of its Behaviour Third Edition, Cambridge University Press, UK (2014)
- 5) Bradshaw JWS, Casey RA, Brown SL : The Behaviour of the Domestic Cat 2nd Edition, CABI Publishing, UK (2012)
- 6) Beaver BV : Feline Behavior -A Guide for Veterinarians Second Edition, Saunders, USA (2003)
- 7) Atkinson T : Practical Feline Behaviour – Understanding Cat Behaviour and Improving Welfare, CABI, UK (2018)
- 8) Ellis SLH, Rodan I, Carney HC, et al : AAFP and ISFM Feline Environmental Needs Guidelines. *J Feline Med Surg*, 15, 219-230 (2013)
- 9) Ellis SLH, Rodan I, Carney HC, et al : AAFP and ISFM 猫にとって快適な環境づくりのためのガイドライン, *Felis*, 05, 103-114 (2014) (8の翻訳版)
- 10) Dantas LMS, Delgado MM, Johnson I, Buffington CAT : Food puzzles for cats : feeding for physical and emotional wellbeing. *J Feline Med Surg*, 18, 723-732 (2016)